

アジア文化研究所・現代社会総合研究所 研究所間プロジェクト

二〇〇六～〇七年度研究調査報告書

# イスラーム世界における伝統的秩序規範の持続と変容

『東洋大学アジア文化研究所研究年報』(二〇〇七年) 第四二

*Annual Journal of the Asian Cultures Research Institute, No.42 (2007)*

TOYO University (Tokyo, JAPAN) <ISSN: 1880-1714>

研究所間プロジェクト 二〇〇六～〇七年度研究調査報告書

Report of the Research Project under the organization of two institutes at TOYO University,

“Asian Cultures Research Institute” and “Institute of Social Science”  
(Years: 2006-2007)

イスラーム世界における伝統的秩序規範の持続と変容

The Continuance and Transformation of the Traditional Order Models in the Islamic World

(研究代表・後藤武秀 アジア文化研究所研究員／法学部教授)

(representative: Prof. Dr. Takehide GOTO, TOYO University, in Japan)

《目次／Contents》

\* 研究目的／Purpose ..... 209

\* 研究経過／Schedule ..... 210

\* 研究成果／Products ..... 211

\* 調査・研究活動／Researches

「モデルタイプにおけるイスラームの伝統的秩序規範の変容調査」  
..... 214

子島 進.....

「アモイ大学および福州大学における

イスラーム系少数民族政策の調査と研究」

..... 後藤 武秀..... 220

「カイロ市におけるイスラームの伝統価値規範のフィールド調査」

..... 赤堀 雅幸..... 221

\* 論文／Articles

「戦前期のイスタンブールにおける日本の経済活動(2)

—コンスタンチノープル日本商品館(イスタンブール日本商品館)

に関する研究—」 ..... 三沢 伸生..... 1

「The Presidency of Religious Affairs and the Republic of Turkey」

.....Ramazan YILDIRIM & Ahmet CIHAN..... 34

「Armenians in the Course of the Russo-Japan War in 1904-1905 and Muslims of Russia after the 1905 Russian Revolution」

.....Seyit SERTÇELİK..... 51

「The Transformation of Sainthood in the Process of Succession

: Saints and Their Descendants in the Western Desert of Egypt」

..... Akahori Masayuki..... 69

## イスラーム世界における伝統的秩序規範の持続と変容

《研究期間》 平成十七～十九年度

《研究代表者》 後藤武秀（法学部教授／アジア文化研究所研究員）

《研究分担者》 後藤 明（文学部教授／アジア文化研究所研究員）

小林修一（社会学部教授／現代社会総合研究所研究員）

斎藤 洋（法学部教授／現代社会総合研究所研究員）

三沢伸生（社会学部准教授／アジア文化研究所研究員）

子島 進（国際地域学部准教授／アジア文化研究所研究員）

員）

東長 靖（京都大学大学院アジアアフリカ地域研究研究

科准教授／アジア文化研究所客員研究員）

赤堀雅幸（上智大学外国語学部教授／アジア文化研究所

客員研究員）

### 《研究目的》

昨今の世界情勢に如実に現れているように、現代の国際問題としてイスラーム世界の存在は極めて重要な問題として浮上してきている。現在はキリスト教世界とイスラーム世界との摩擦ばかり注目されているが、日本を含めたアジア世界においてもイスラーム世界との関係は重要である。本研究はイスラーム世界の諸問題を、イスラーム教の宗教意識や、イスラーム法といった伝統的価値規範がどのように形成されてきて、それが現在においてどのようなようにして持続しているのか、またはどのように変容してきてい

るのかを、総合的に研究することを目的としている。

具体的には、研究期間内において、イスラームの根本的価値観を表象する形で伝統的価値規範を形成している、司法という公的・外的な側面としての「イスラーム法」、精神的・内的な側面としての「聖者信仰・スーフィズム」の二つの面について、イスラームを専門とする五人の専任・客員研究員と、アジア法・国際法に精通する二名の研究員、社会学的見地から社会における伝統的規範の有り様を研究する一名の研究員の共同作業によって、調査・解明していくことを目的としている。

イスラーム世界における伝統規範を考える上において、現地におけるフィールドワーク経験を豊富有する文化人類学研究者、そしてアラビア語・ペルシア語・トルコ語によるイスラーム古典に精通するイスラーム思想・宗教学研究との共同研究が不可欠である。子島はペルシア語・ウルドゥー語圏のフィールドワークを専門とする地域研究者・文化人類学者であり、アラブ圏を専門とする赤堀が組織に加わることにより、文化人類学研究が磐石になる。東長は国内ばかりか国際的にも評価を得る思想・宗教研究者であり、また本学東洋大学が前任校という経歴から、全面的な協力を得ることができる。また後藤（明）・三沢は歴史学研究者として、それぞれアラブ圏・トルコ圏を専門として研究を展開しており、赤堀・東長とも古い知己である。こうして外部の二人を加えて五人のイスラーム研究者の体制をとり、二人の法学者・一人の社会学者と共同して、本プロジェクト遂行上、理想的な体制が完成する。

## 《研究経過》

プロジェクト最終年度である平成十八年度において、研究プロジェクト全体の総括を進めながらも、前年度に立案した年度計画に基づき研究を進めている。そのなかでもイスラーム法と伝統的価値規範との乖離・離反・相克状況をより明確にすることで伝統的価値規範の持続と変容の研究を重視し、昨年度末に子島をモルディブに現地調査に派遣して、自身の進める南アジア圏におけるワクフの比較研究、ならびに観光立国でしられる同国のイスラームの伝統的秩序規範の現状の分析を進めた。これと並行して後藤武秀・齋藤の協力のもとに、台湾・東南アジアにおけるイスラーム法研究を進め、仏教の伝統的秩序規範とイスラームの伝統的秩序規範の相克関係・類似関係について明らかにした。また日本の家族社会に明るい小林は、三沢の協力を得ながら、戦前期の日本の回教政策展開上に見られた、日本によるイスラームの伝統的秩序規範がいかに表面的で自己中心的であるかを明らかにすることに成功した。その研究成果は三沢との共著として、現代社会総合研究所『現代社会研究』五号に掲載が決まった。この結果として後藤武秀・齋藤・小林の研究を総合して、東アジアにおけるイスラームの伝統的秩序規範が極めて限定され理解されていなかったことが解明されたことが大きな成果である。これに付随して三沢の知己であり偶々別件で来日されたトルコ共和国のセイト・セルトチェリク准教授より、日露戦争期におけるイギリスにおけるイスラームの伝統的秩序規範とアルメニアに代表される東方キリスト教会の伝統的秩序規範の理解が、同じく表層的であり小林の結果に通ずるものであるとの指摘を受けた（氏の論稿は本号に

再録）。このことから世界的規模で、キリスト教・仏教・神道など他者によるイスラームの伝統的秩序規範理解に関する比較研究の重要性が明確化された。

聖者信仰・スーフイズムに関しては、赤堀・東長両客員研究員を中心に進め、後藤明・三沢を交えて、思想研究・文化人類学研究の成果を歴史的に解釈して、その持続と変容に関する研究を進めた。本年度は昨年度に果たせなかった赤堀をアラブ圏の中心的存在であるエジプト・カイロ市に派遣して、高等スーフイー評議會を中心として聖者信仰の現状にかんする現地調査を遂行した。東長は前年度のトルコへの出張調査成果をより進化させるべく、聖者信仰のテキスト分析に従事した。また三沢の知己であり、本プロジェクトに関心を有しているトルコ共和国のアフメト・ジハーン准教授の来日に際して、同氏を囲んでの研究会を設けて、オスマン帝国からトルコ共和国への移行期において、国家による宗務庁設立によってイスラームの伝統的秩序規範がどのように管理されてきたのかの発表・意見交換ができたことが大きな収穫であった（本号にその詳細を再録）。

加えて三沢は小林との共同研究と並行して戦前期の日本のイスラームの伝統的価値規範の習熟度を解明すべく、新生トルコ共和国首都イスタンブールに設けられた日本商品館についてその機関誌である館報の分析を進めて、成果の一部についてはイスタンブールで開催された学会において口頭発表を行った。

最終年度である平成十九年度において、過去三年間の全体の総括として平成二〇年一月二六日（土）に研究成果公開事業として東洋大学研究所間・シンポジウムを開催し、報告書の取りまとめをおこなった。



<研究成果公開事業>  
東洋大学研究所隔プロジェクト・シンポジウム

イスラーム世界における伝統的秩序規範の持続と変容

期日：2008年1月26日(土) 14:00~17:30  
会場：東洋大学白山キャンパス 3号館3205番

入場無料



発表:

- 赤堀雅幸 (上智大学教授・東洋大学アジア文化研究所客員研究員)  
「カイロ高等スーフィー会議」
- 東長靖 (京都大学名誉教授・東洋大学アジア文化研究所客員研究員)  
「現代社会におけるスーフィズム」
- 子島進 (東洋大学准教授・東洋大学アジア文化研究所研究員)  
「モルディブ社会の変容：大統領マウーン・アブドゥル・ガユームの伝記から」
- 三沢伸生 (東洋大学准教授・東洋大学アジア文化研究所研究員)  
「戦前期の北京における回教研究會」

総合司会：後藤武秀 (東洋大学教授・東洋大学アジア文化研究所研究員/プロジェクト代表)  
コメント：小林修一 (東洋大学教授・東洋大学現代社会総合研究所研究員)

主催：東洋大学アジア文化研究所&現代社会総合研究所  
〒112-8606 文京区白山5-28-20 TEL: 03-3945-7490

\* シンポジウムは「東洋大学研究所隔プロジェクト研究助成金」に基づき開催されます。

## 《研究成果》

### 一、学会および口頭発表

- \* 後藤武秀「分権改革後日本の市町村合併和地方税財政改革問題―以關東地方為例―」台湾・中華大学、二〇〇七年五月二五日。
- \* 後藤武秀「華人社会の基礎としての祭祀公業の解体と現代的再編―華人の行動を理解するために―」北九州大学法学部、二〇〇六年十二月九日。
- \* 後藤武秀「これからの日本語教育と池上文庫の果たす役割」台湾・池上文庫、二〇〇七年三月二十七日。
- \* 三沢伸生「日本・オスマン朝史にかかわる文書史料」日本中東学会第二三回年次大会(於東北大学)二〇〇七年五月一三日。
- \* Nobuo MISAWA (三沢伸生) "Istanbul Japon Ticaret Sergisi (1928-1937)." Birinci İktisat Tarihi Kongresi (Istanbul, TURKEY) 二〇〇七年九月七日。使用言語はトルコ語。
- \* 子島進「イスラーム的NGO…事例と研究課題」NIHUプログラムイスラーム地域研究「イスラームとNGO」班研究会(早稲田大学)。二〇〇七年一月九日。
- \* 東長靖「スーフィズム/タリーカ研究の課題と展望」京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科附属イスラーム地域研究センター設立記念講演会、(於京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科学生会議室) 二〇〇七年二月二日。

二、論文等著作物

\*後藤武秀「宗教施設における社会倫理教育—日本と台湾の場合—」

『東洋』四十三巻九号、二〇〇六年十二月、三二—三七頁。

\*後藤武秀「台湾におけるイスラーム」『アジア文化研究所研究年報』

四十一号、二〇〇七年二月、二〇〇—二〇二頁。【間プロのクレジット入り】

\*後藤武秀「戦後台湾における祭祀公業の変遷—整理と再編—」アジア文化研究所・アジア地域研究センター編『アジアの経済発展と伝統文化の変容』所収、二〇〇七年三月、八九—一〇七頁。

\*後藤武秀「台湾における罪観念—『玉歴鈔伝』の描く罪とその予防—」

『法学新報』一一三巻一一・一二号、二〇〇七年五月、二八一—三〇三頁。

\*小林修一・三沢伸生「回教研究会機関誌『回教』の史料的价值の検証—「回教政策」に關係する日本語史料分析の試みとして—」『現代

社会研究』第五号、二〇〇八年（掲載決定）【間プロのクレジット入り】。

\*齋藤洋『国際法講義ノート・資料二〇〇七』虹有社、二〇〇七年四月。

\*齋藤洋『公法基礎入門』八千代出版、二〇〇七年五月。

\*齋藤洋「光華寮事件に関する一考察—台湾の法的地位を中心に—」

『東洋法学』第五〇巻第一・二合併号、二〇〇七年三月、一八五—二〇二頁。

プロジェクト

\*ソノン・スチャリクル著（齋藤洋訳）「タイ法と仏教法」『東洋法学』

第五十一巻第一号、二〇〇七年一〇月、一一一—一四五頁。

\*Nobuo MISAWA (三沢伸生) "Japonya'da basılmış olan ilk Türkçe Kitap" *Tarih ve Disince*, 69, 2006, pp.28-31. トルコ語。

\*三沢伸生「戦間期のイスタンブルにおける日本の経済活動（一）—ロンドン・チノーブル日本商品館（イスタンブル日本商品館）に関する研究—」『アジア文化研究所研究年報』第四十一号、二〇〇七年二月一八〇頁—百九九頁。【間プロのクレジット入り】

\*Nobuo MISAWA (三沢伸生) & Gökür AKÇADAĞ "The First Japanese Muslim, Şöhret NODA (1868-1904)" 『日本中東学会年報』第二三巻一号、二〇〇七年九月、八五—一〇九頁。

\*Nobuo MISAWA (三沢伸生) "The origin of the commercial relationship between Japan and the Ottoman Empire: the tactics of young *Torajirō* YAMADA, as a "Student Merchant"" 『東洋

大学社会学部紀要』四五巻一号、二〇〇七年十二月、五一—八七頁。

\*三沢伸生「戦間期のイスタンブルにおける日本の経済活動（二）—ロンドン・チノーブル日本商品館（イスタンブル日本商品館）に関する研究—」『アジア文化研究所研究年報』第四二号、二〇〇八年（本号所収）。【間プロのクレジット入り】

\*Nobuo MISAWA (三沢伸生) "Japanese Commercial Museum in Istanbul (1928-1937)" 『日本中東学会年報』第二三巻一号、二〇〇八年（近刊）。

\*Robert Hughes & Susumu NEJIMA (千島進) (eds.), *Ambassador*

Lecture Series 2006: *Pakistan, United Kingdom, Ethiopia, and Guatemala*. Tokyo: Faculty of Regional Development Studies, Toyo University, 2007.

\* 東長靖 「スーフイズム／タリールカ研究の課題と展望」『イスラーム世界研究』第一号、二〇〇七年、一二―二二頁。

\* Yasushi TONAGA (東長靖) "Preface" to "Special Issue: Birth and Succession of Holiness among Sufis and Saints." *Oriens* 42, 2007, pp.1-3.

\* 東長靖 「研究案内：道具類」小杉泰・林佳世子・東長靖編『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会、二〇〇八年（近刊）。

\* 東長靖 「研究案内：スーフイズムとタリールカ」小杉泰・林佳世子・東長靖編『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会、二〇〇八年（近刊）。

\* Yasushi TONAGA (東長靖) "Preface" to "Special Issue: The Tariqa's Cohesional Power and the Shaykhhood Succession Question." *Asian and African Area Studies*, vol.7-1, 2007 (近刊), pp.1-3.

\* Masayuki AKAHORI (赤堀雅幸) "Narrating Tales of Saints is Making Saints: Three Different Hagiographic Traditions of a Muslim Saint in the Egyptian Desert." *Oriens* 42, 2007, pp.27-39.

\* 赤堀雅幸 「ポストコロニアリズム」村井吉敬他編『グローバル社会のダイナミズム―理論と展望』（地域立脚型グローバル・スタディーズ

〈報告〉平成一九年度「イスラーム世界における伝統的秩序規範の持続と変容」プロジェクト

叢書第一巻）上智大学出版、二〇〇七年、二五〇―二五二頁。

\* Masayuki AKAHORI (赤堀雅幸) "The Transformation of Sainthood in the Process of Succession: Saints and Their Descendants in the Western Desert of Egypt" 『アジア文化研究所研究年報』第四二号、二〇〇八年（本号所収）。

### 三、その他

\* 後藤明 「羽田正『イスラーム世界の創造』『歴史学研究』八二三号、二〇〇七年、五四―五七頁。

\* 後藤武秀 「故事に学ぶ―管鮑の交わり―」東洋四四卷一号、二〇〇七年四月、二―三頁。

\* 後藤武秀 「台湾法史研究の意義」『東洋』四四卷二号、二〇〇七年五月、七―一〇頁。

\* 後藤武秀 「日清条約と台湾の領有」『東洋』四四卷三号、二〇〇七年六月、一三―一六頁。

\* 後藤武秀 「台湾における政治文化の変容―總統辭職要求と民主化―」『東洋』四四卷四・五号、二〇〇七年七月、二七―三六頁。

## モルディブにおけるイスラームの伝統的秩序規範の変容調査

アジア文化研究所研究員 子島 進

期間 二〇〇七年二月一二～二二日

調査地 モルディブ（マレ、バンドス島）

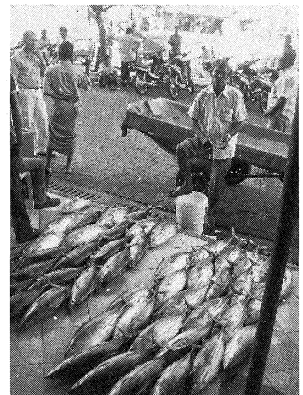
### 1 はじめに

モルディブは国民のすべてがムスリムというイスラーム国であるが、イスラーム研究の文脈で論じられたことはほとんどない。むしろ、近年においては、インド洋に浮かぶリゾート立国として広く世界に知られており、日本における人気も高い。「究極のリゾートライフ&ダイビング」「一島丸ごとがバカンスの舞台!」「海に散りばめられた真珠の首飾り」、これらがガイドブックにおけるモルディブ観光のキャッチフレーズである。イスラーム世界広しといえども、このような「南の楽園」イメージで語られている地域は類を見ないのではないだろうか。こうした形で現在に至るまでのイスラームの伝統的秩序規範が変容した過程をたどることは極めて意義深いことである。筆者は、モルディブ研究の可能性を、端的に言って「イスラームと観光」に見出している。

モルディブが観光産業中心の国造りを始めてから、四〇年近くが経過した。それまでは、カツオ漁を中心とする漁業が中心であった。今日でも漁業は、観光に次いで重要な産業である（写真1）。リゾート開発に伴い経

済的な状況が大きく変化したことで、モルディブにおける伝統的秩序もまた大きな変容を遂げたことが予想される。その方向性は、「近代化に伴う世俗化」へと単純に収斂するものではない（この点は、これまでのイスラーム世界全般における研究からも明らかなことである）。一方では経済成長に伴い、多くの留学生がサウジやエジプト等の国々でイスラーム高等教育を受けることが可能となった。一九七八年以来政権の座にあるアブドゥル・ガユーム大統領もカイロのアズハル学院に留学した経験をもっている。すなわち、人類学で言うところの「大伝統」へのアクセスがモルディブの人々にも可能となったのである。そうであるならば、本研究で問題となるのは規範の持続と変容ばかりでなく、その「強化」も含まれることになる。あるいは、それまでモルディブでは知られていなかったイスラーム的規範の「導入」さえもが研究の射程に入ってくるだろう。もちろん、短期の間でこれらの問題群になんらかの答えを出すことはできない。ここでの記述は、今回の予備的調査で得た簡単な印象にとどまらざるをえない。

筆者はこれまでパキスタンを主たる調査地として、文化人類学の研究に従事してきたが、近年はインドやバングラデシュを訪れ、「南アジアにおけるイスラーム」へと視野の拡大に努めてきた。このような広域調査の一方で、パキスタン以外の場所で、長期の住み込み調査を（幼児を含む家族連れで）行いたいと希望している。今回の滞在中に獲得した知見から、モ



1. マレの魚市場



ルディブの首都マールレにベースを置く形で長期調査を行えば、文化人類学、南アジア地域研究、ならびにイスラーム地域研究の分野に、新たな成果をもたらすことができると予測するものである。

## 2 スケジュール

- 一二日…スリランカ航空UL461便成田発マールレ着
- 一三～一五日…マールレ滞在
- 一六～一八日…バンドス島
- 一九～二一日…マールレ滞在
- 二二日…スリランカ航空UL460便成田着

## 3 モルディブの概要

(※このでの記述は、後出の文献リストのNgCheong-Lum 2000を主として参考になっている)。

モルディブは、インド洋に浮かぶ島国である。インドの南六〇〇キロ、スリランカの西四〇〇キロに位置している。九万平方キロメートルにおよぶ広大な海域に点在する一一九〇の島々から、この国は構成される。そのうち、二〇〇の島々に三〇万人が居住しているが、一〇万人は首都マールレに集中している。一つ一つの島の面積はきわめて小さく、総面積は約三〇〇平方キロメートルに過ぎない。島々はきわめて平坦な地形をしており、標高二メートルを超えるものはない。

〈報告〉平成一九年度「イスラーム世界における伝統的秩序規範の持続と変容」プロジェクト

国土を構成する島々が赤道を跨いで分布していることから明らかなように、モルディブは「常夏の国」である。高温多湿の熱帯性気候を示し、平均気温は日中三〇度、夜間二四度である。一月から四月の北東モンスーンの時期が乾季、五月から一〇月の南西モンスーンの時期が雨季である。インド洋の広大な海域に島々が点在するにもかかわらず、モルディブの言語は基本的にデイベヒ語のみである。デイベヒ語はターナ文字によって表記される。かつてイギリスの保護領だったこと、また近年、国際的リゾートとして発展してきたことを受け、英語もかなりの程度まで通じる。リゾート滞在はもちろん、首都マールレでの短期滞在者も英語だけで何の不自由もしないだろう。

イスラームの到来は一二世紀と考えられている。この時期からイスラームへの改宗が進み、ヒンドゥーや仏教は姿を消すことになった。今日、イスラームがモルディブ唯一の宗教となっている。すべての住民がスンナ派ムスリムに属する。

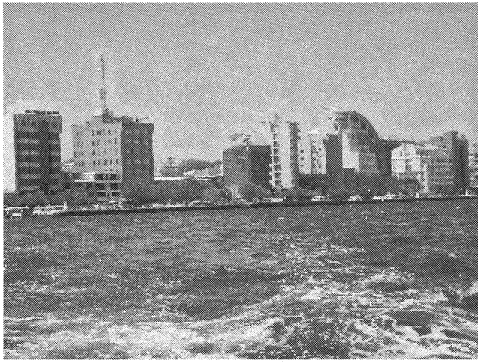
モルディブを宗教と社会を考えるうえで、この国を次の三つの部分の集合体として見ていくことが当面は有用であろう。

- (1) 首都マールレ
- (2) リゾートホテル用として開発された一〇〇の島々
- (3) 住民が居住する二〇〇の島々

首都マールレは全人口の三分の一を抱え、政治・経済・宗教の中心地となっている(写真2)。モルディブは極小の島々の集合体であり、首都マールレといえどもわずか二キロ×一キロの広さしかない。ここに一〇万人近い人

間がひしめく。あちこちで古い家屋を取り壊し、七、八階のビルに建て替える工事が進行している。ここがモルディブ調査の拠点となる。

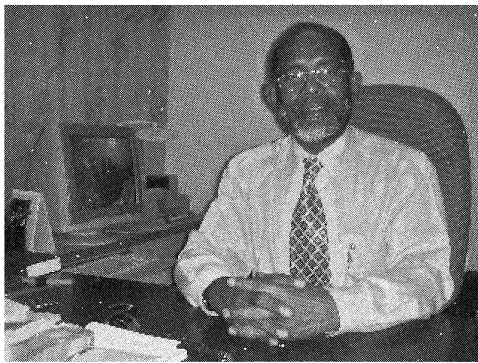
グランド・モスク（写真3）と併設のイスラミック・センターは、マーレの北側、官庁関係のビルが集中するエリアにある。モスクの正式名称は、Masjid Sultan Mohammad Thakurufan Al-Azam。一五七三年にポルトガルを撃破し、独立を回復した英雄に由来する。五五〇〇人が集団礼拝を行うことができる。併設の図書館には、イスラーム関連書（アラビア語、ウルドゥー語、英語、デイベヒ語）が収められている。ここに本部を置くイスラーム最高評議会がマーレをはじめとして、モルディブ全島のモスクを統括している（二〇〇七年二月現在で、モルディブには七一〇のモスクがある。うちマーレに三二二。政府予算によって、毎年二五のモスクを改修あるいは新設している）。サウジアラビア（Islamic University of



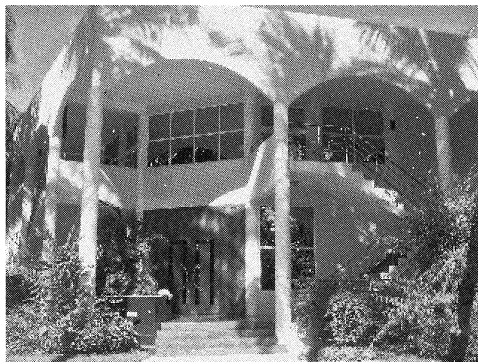
2. 首都マーレの遠景



3. グランドモスク



4. イスラーム最高評議会のウラマー



5. バンドス島の新しいモスク

Madina)、エジプト、パキスタン等での留学経験をもつウラマーがここで働いている（写真4）。

評議会を訪問した際に、あるウラマー（正確にはアーリムだがウラマーで統一する）から、リゾートのパンフを手渡された。ページをめくると、ビキニ姿の女性がカクテルを飲んでいる写真があった。「せっかくだがモルディブに来たんだから、あなたもぜひリゾートを楽しんでいってください」とのことだった。多くのイスラーム地域研究者が驚くであろう、新鮮な経験である。このウラマーの「モルディブでは、リゾートと住民が暮らす島が別々なので、観光の発展はイスラームにとって問題にならない。人々は落ち着いて信仰を守ることができる」との言葉は、確かにリアリティを有している。ただし、両者の間にまったく緊張や対立が生じないと考えるのは早計であろう。

「美しいモルディブの島々が、沈没の危機にある」。モルディブは地球温暖化の議論の最前線にも位置している。このことは広く知られているので、「イスラームと環境」の観点からも話を聞いたところ、ウラマー側からはハデイースの引用が披瀝された。すなわち預言者ムハンマドの言葉として「木を切つてはいけない」「池で小便をして汚してはいけない」「公道脇の木陰で小便をしてはいけない」といったものを挙げ、ここから「環境保護」を導き出すというものであった。第一印象では、あまり体系だった内容ではないと感じられたが、学校での環境教育におけるハデイース引用の有無も含めて、重要な調査課題であろう。

観光客の多くは、国際線で空港島（マアレからボートで一〇分ほどの距離）に到着し、そこから直接目的地のリゾート島を訪れる。そして数日間の滞在後、また空港島を経て帰国する。これらのリゾートでは、ゲストは水着で歩き回っているし、アルコールもふんだんに飲める。スパに行けば、女性セラピストによるマッサージを受けることもできる。バーやスパの仕事にあたるのは、スリランカやタイ出身の非ムスリムが多いと言われている。ダイビングのインストラクターも含めて、日本人スタッフがいるホテルも珍しくない。

筆者が滞在したバンドス・アイランドリゾートは、一九七六年創設の老舗リゾートである（モルディブ初のリゾートであるクルンバ島に次いで、二番目のオープン）。ダイビングやスノーケリングを楽しむのに適しており、高い人気を維持し続けている。何度もリニューアルを重ねているとのことで、古臭い印象はまったくない。宿泊したのはスタンダード・ルームであったが、エアコン、冷蔵庫、電話、シャワーなどが完備されていた。

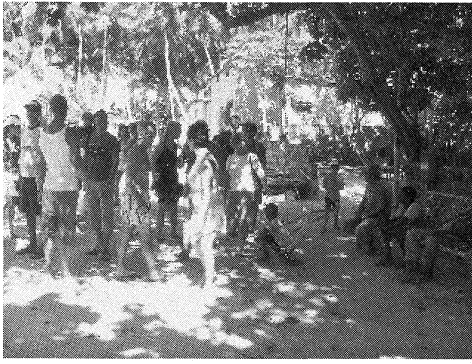
バンドスはマアレから船で三〇分程度の距離であるが、五二〇人のスタッフ全員が住み込みで働いている。スタッフの出身国は、インド、スリランカ、バングラデシュ、タイ、フィリピン、日本、イタリヤ、インドネシアの八カ国におよぶ。ここには新設の立派なモスク（写真5）があり、二人の専従イマームが配されている。イスラーム最高評議会で聞いた話では、空港や軍にもイマームは派遣されている。バンドス島のすぐ隣にある無人のクダ・バンドスは、モルディブ人が休日に遊びに行く島として知られている。金曜日になると、ここにもイマームが派遣され、説教を行うとのことである。

モルディブ人が暮らす島と、リゾート島は完全に分かれている（モルディブ南端のガンにおいては、住民の暮らす島にリゾートが建設されているが、大多数のリゾートは上の原則のもとにある）。このことが、外国人のゲストに自由を満喫する時間を保証するとともに、ムスリムであるモルディブ人の落ち着いた生活環境を守っている。経済成長を遂げながら、急激な住環境の変化（破壊）を経験していないのがモルディブの特徴だと言うこともできるだろう。実際、歩いてもほとんどの島は一周一〇分とか二〇分程度なので、マアレ以外のほとんどの島では自動車も走っていない。先のウラマーの余裕のある態度も、先に述べたように、このモルディブ独自の三空間の分離を前提としている。

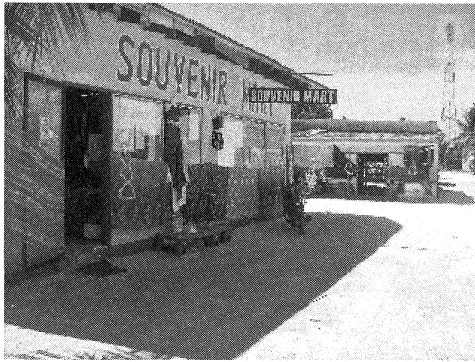
バンドス島に近いヒマフシ島を短時間ながら訪れることで、島民の生活の一端を垣間見ることができた。バンドス・アイランドリゾートが提供するアイランド・ホッピングの一環である。人口は五〇〇人程度だが、リゾートから近いため外国人が恒常的に訪れている（写真6）。このため、数件

のおみやげ物屋さんもある（写真7）。外国人の訪問地となっている島（リゾートではなく住民が暮らす島）は、モルディブ全体で二〇から二五程度とのことである。ヒマフシには、みやげ物販売以外の産業としては、港に魚の加工工場がある。

これらの住民が暮らす島々においては、呪術的な要素が色濃く残されているとされる。今後の研究課題としてきわめて興味深い点である。換言すれば、知識あるいは学問としてのイスラームが定着するには、もっと多くのウラマー人口が必要とされている。しかしウラマーの再生産を行うための施設や制度を、現在のモルディブは有していない。土地が不足しているので、経済成長が続いているにもかかわらず大学も存在しない状況である。「埋め立てて人工の島を造れば、大学も建てられるだろう」というのが、ホテルの従業員のコメントであった。



6. ヒマフシ島の外国人観光客



7. ヒマフシ島のみやげもの屋

#### 4 文献

今回、文献の収集も重要な調査項目であった。日本で得られるモルディブに関する情報は大量にあるが、かなり偏ったものである。すなわち、人気のリゾートとして、観光ガイドや関連エッセイ、写真集、DVDなどは毎年内容も更新されており、モルディブの高い人気を示している。

一方で、文化人類学やイスラームといった観点からの情報となると大きく欠落している。まず、モルディブを調査対象とする研究者自身がきわめて少ない。これは、すでに述べたように、かなりの調査費用を要するということが大きく反映していると考えられる。文化人類学や地域研究では、研究者個人による息の長い調査研究が求められる。その基礎となるのが、たいいていの場合、大学院生時代における一年ないし二年の長期調査である。しかしリゾートに経済の根幹を依拠し、かつ土地の狭いモルディブでは物価や家賃がきわめて高い。一年間の滞在で数百万円の出費が予想されるフィールドを調査対象とする大学院生は、ほとんどいないだろう。モルディブ専門の研究者が育ちにくい環境にあると言える。このため、日本では文献収集自体が進んでいない。この状況は、他の国においても大同小異のようである。研究者の数自体が少なく、論文があまり公表されていないからIT時代になっても的確な情報を入手することはできない。

マール在住の宗教学者や研究者を訪問し、書店を巡り歩くことで、基礎的な文献を収集することができた。以下に記す研究所や文献に関する情報は、今後のモルディブ研究の基礎となるものである。

とりわけ、学術調査においては国立言語歴史調査センター (National Centre for Linguistic and Historical Research) が重要である。

一九八二年に創立されたこのセンターからモルディブの歴史・文化に関する重要な研究成果が刊行されている。

Mikkelsen, E. 2000 *Archaeological Excavations of a Monastery at Kaashidhoo: Courie shells and their Buddhist context in the Maldives*, National Centre for Linguistic and Historical Research: Male.

Mohamed, N. and P. Ragupathy 2005, *Inscriptions of Maldives - No.1: Gold Leaf from Veymansoo & Legends on Casket from Nilanshoo*, National Centre for Linguistic and Historical Research: Male.

National Centre for Linguistic and Historical Research 1992 Male: Hukuru Miskitiy, National Centre for Linguistic and Historical Research: Male.

—1999 *Dhivehi Writing Systems*, National Centre for Linguistic and Historical Research: Male.

—2002 *The National Museum*, National Centre for Linguistic and Historical Research: Male.

市内に数軒あるが、モルディブ関連の書籍をまとめて購入できることはない。

Hussain, A. 1991 *Mysticism in the Maldives: Eyewitness Accounts of Supernatural Encounters*, A Novelty Publication: Male.

Zuhair, M. 1991 *Practical Dhivehi*, A Novelty Publication: Male.

みやげ物屋を「まめに覗くこと」思わぬ本や古い写真集を発見することもある。次のような興味深い文献を入手することができた。特に一九八三年刊行の写真集 *Maldives: A Nation of Islands* が、当時のトリーの全景など貴重な写真が含まれている。急激に変貌を遂げつつある首都の歴史資料としての価値が高い。

Department of Tourism 1983 *Maldives: A Nation of Islands*, Media Transasia Limited for Department of Tourism: Male.

Ellis, R. 1998 *A Man for All Islands: A Biography of Maumoon Abdul Gayoom President of the Maldives*, Times Editions: Singapore.

Nasheed, M. 2004 *Dhivehi Conversation (fifth edition)*, privately published: Male.

Reynolds, C. 2003 *A Maldivian Dictionary*, RoutledgeCurzon: London.

書店のノベルティ・ブックスからは、下記の書籍が出版されている。ただし、広々とした店内には、それほど多くの本はなかった。書店はマーレ

〈報告〉平成一九年度「イスラーム世界における伝統的秩序規範の持続と変容」プロジェクト

## アモイ大学および福州大学におけるイスラーム系少数民族政策の調査と研究

アジア文化研究所研究員 後藤武秀

期間 二〇〇七年四月二十九日～五月一日

調査地 中国 アモイ大学、福州大学

中国福建省に設置されているアモイ大学および福州大学は、中国南部地区の基幹大学であり、とりわけ南部を代表する法学部では南方系の少数民族政策の研究が進められている。今回の訪問調査・研究は、両大学においてイスラーム系住民に対する宗教政策と法政策について聞き取り調査を行い、資料の収集を進めることである。

四月二十九日、午後一時過ぎにアモイ空港に到着、直ちにアモイ大学に向かい、法学院の林東平教授、劉永光教授と面談する。訪問目的はすでに伝えてあったので、アモイ大学の少数民族政策研究の動向について話を伺い、イスラーム関連資料の提供を受けた。

四月三十日は、林教授の同行を得て、福州大学を訪問する。福州大学法学部は、教員の多くをアモイ大学からの派遣に頼っているが、福建省の省都に位置していることもあり、中国南西の諸州から流入する少数民族問題の研究が進められている。しかし、福州にはイスラーム系住民は少ないという点で、午後より泉州に移動する。

泉州は古代より交易港として繁栄した町であり、イスラーム商人の往来も多かったようで、モスクである清浄寺が残されている。清浄寺付近は、

イスラーム系住民が多く居住しており、独特の団結を維持している。清浄寺を訪問し、管理人にイスラーム文化の維持に関する説明を受けた。とりわけ食事に関する問題が多いことを予想していたが、冷凍技術の進歩により、泉州から蘇州方面までの南部地域で共通してハラールの儀式を済ませた肉類が入手可能であるとのことであった。毎日行われる礼拝については、泉州ではイスラームが中国人の間にも理解されており、仕事上の礼拝も問題なく行われているとのことであった。古くからのイスラーム系住民が多いことから、伝統的な中国文化との摩擦は少ないように見受けられた。かつて、蘇州のイスラーム系住民について調査したときに、非ムスリムの中国人から、イスラーム系の中国人の団結が地元の人々との文化的軋轢の原因となつているという説明を受けたことがあったが、泉州ではその歴史の古さからであろうが、文化的な対立は感じられなかった。なお、中国で一般にイスラーム系住民は「回族」と呼ばれ、シルクロードを介して中国西部方面から流入した民族を意味するが、泉州の場合は、それとは異なり、海上交易を通じて東南アジアを介して伝えられたイスラームが主流のようである。清浄寺周辺の住民を見る限り、いわゆる西アジア系の民族ではなく、すべて福建省生まれの中国人であった。単純に中国イスラーム教徒として一括した理解をすることなく、その多様性を踏まえながら、中国南部の沿海地域におけるイスラームの伝播について、研究する必要性を感じたところである。

短期間の出張であったが両大学のスタッフの協力を得ることができて濃密で充実した調査を実施し、期待した成果を得ながら、五月一日、午後便で帰国した。